Ⅰ-2　外国人として生きていく

(要約)

　日本生まれのカンボジア人であるチャンは、小さい頃は母国語をしゃべれなく、逆に日本語に関しては日本人と変わらずにしゃべることができ、「自分は外国人」という事を気にする事はなかった。小学四年生頃に「国際教室」で母国語の勉強会に参加し、カンボジア人なのにカンボジア語ができない自分に違和感を持ち、「自分はいったい何者なんだ」「日本人ならこんなことなかったのに」という考えが生まれ、「自分嫌い」が始まった。人前で外国人として振舞うのが嫌であったのだ。そのなかで中学二年生の時に「外国籍は絶対参加」の「選択国際」という授業を嫌々受けた。そこで、家族構成と親のルーツをプリントに書くときに何も書けず、母国のことも親のことも何も知らないで、それまで「外国人である自分」を否定してきたのがとんでもない事だと思え、積極的に授業に参加するようになり、自分を肯定的に捉えるように変化していった。さらに、「国際スピーチ」での発表が、「外国人としての自分」を晒け出し、「カンボジア人―チャン　ソワンナリット」としての新たなスタートをさせた。もう、自分が嫌い、外国人は嫌だという考えはなくなっていた。すたんどばいみーのスタッフになり、今では、昔の自分を説得しているようなものになっている。

Ⅱ-2　外国籍の女の子の生き方について考える

(要約)

　外国人の女の子は、家や学校の中での生きづらさなど、外国人の女の子たちとの関わりの中で固有の大変さを抱えている。日本の学校や社会への適応を求めている親たちの要求はあるが、子どもたちが実際に生きている世界ではそううまく行かない。彼女たちは、言葉の問題や環境の差異を常に感じている為、日本人よりも同じ外国人で固まることが多い。日常的に外国人に向けられている多くの目線の中で行動するプレッシャーと向き合って、親との対立を恐れずに、家や外国人同士の固まりの外での活動を続けることが大事である。

彼女たちはこの先、家族と戦い、日本の学校、社会と戦う。日本社会に出て、それぞれの場所で生きる外国人の女の子のこれらの問題を日本人にも向けたい。

Ⅲ-1　新たな“展開”と“可能性”に期待して・・・

(感想)

　ベトナムでの話を読んで驚いたのは、ベトナム人の中には「越人」、「越僑」、「外国人」の三種類のカゴテリーがあるということだった。純粋なベトナム人(越人)は海外から帰ってきたベトナム人（越僑）とは一線を引くのである。この章の著者であるグエンは同じ越僑の人たちが尊重し付き合ってくれた為、自分に自信が持てるようになったと述べているが、日本にいた時とあまり変わらない状況ではないかと思った。ベトナム人なのに、ベトナムで外国人のように見られているのが驚いた。グエンは越人として生きていこうとは思わなかったと述べているが、その時の心境はどうだったのかが気になった。そして、その後のChiさんとの会話の中の“私たちViet Kieu 同士、お互いに支え合うのよ・・・”という言葉が越僑の人たちが越人として受け入れられない辛さを表しているではないかと感じた。

　次に、日本人の取組や活動が、実は、日本社会のために展開されたものであるという話を読んで、日本人は彼ら外国人の心と向き合っていないことに気づかされた。特に、「“語れば”利用され、“語らなければ”相手にされない。」の一文には、確かにそうだと思った。日本人は彼らが語れば、それを解決しようとするが、語らなければ、困ったことはないとみなす。実際は語りたくても語れない人達もいるのだが、彼らのことは困ってない人達だとみなしていたのだということを感じた。本当に外国人を支援したいならば、支援の取組や活動を計画する時点から彼らと共に歩んで行くことが必要なのだと思った。

「隠れ外国人」と「すたんどばいみー」

(感想)

　今の学校は「個への専門的な支援」という「課題の個別化・特化」を求めた結果、重層構造になってしまった、つまり、子どもたちが抱える課題を個人が抱える問題とし、課題を持つ子供を特別学級といったもので棲み分けし、表舞台である学級は「課題を持たないで済む者たちがいる場所」としているのである。ゆえに、外国人生徒たち表の舞台にいるために「カタカナの名前」を隠し、「日本名」を使うのであるということを読んだときに、今の学校が抱えている問題は、常識でなければいけない、常識から外れた子供たちは常識の中に戻るように強制し、できなければ隔離するといったところにあるのだと思った。学校では多様性を持てと教えられているのに、その学校で皆が同じことを考え、思う様に指導していたのはおかしいと感じた。そして、これらの解決には、「争い」ではない「対立・批判」が必要であるということを読み、その通りだと思った。「対立・批判」をし合うことは、お互いの心を理解するためには必要だし、今ある常識の中に子どもたちを押しこめるのではなく、子どもたちが「対立・批判」をした結果できた常識（ルール）を尊重することが彼らの成長につながるのではないかと感じた。